

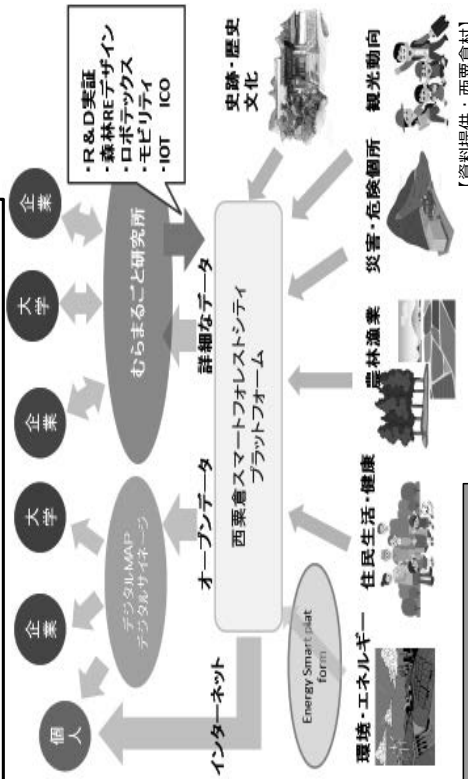
岡山県西栗倉村の「デジタル変革 (DX) への取り組み」について



- 2004年 合併しないことを選択 <人口約1400人、森林 (面積95%) の整備・活用が生き残りの道>
 - 2008年「百年の森林 (もり) 構想」スタート。 (百年の森林に囲まれた”上質な田舎”を目指す ⇒ 移住)
 - ローカルベンチャー支援 (45社、221人) ⇐ 姫路から約1時間 + 外の人を受け入れ、情報を取り入れる”DNA”
 - 2018年～「生きるを楽しむ」(暮らしの課題に対応)、「百森2.0」(森林が生み出す価値の最大化を目指す)
 - 地域の課題を最新テクノロジーで解決したい ⇒ 「西栗倉村スマートフォレストシティプラットフォーム」の構築。
 - 2020年7月 村内外の21の企業・個人等が資金を拠出し、「(一財)西栗倉むらまると研究所」設立。
- ⇐ 地方創生推進班 (役場PT) の若手職員発案

西栗倉スマートフォレストシティプラットフォーム	
推進母体	・西栗倉村、「(一財)西栗倉むらまると研究所」
地域課題	荒れた山地・農地、担い手不足、獣害、省エネ・Co2削減・脱炭素、交通弱者など。
データの種類	森林内の樹木の種類・大きさ、再生可能エネルギー稼働状況、使用量、車両の運行状況といった村内にある様々なデータ。
解決への取り組み	・データの収集、蓄積、公開 (オープンデータ)。 ・企業や大学と協働して、最新テクノロジー (IoT、AI、ドローン、ロボット等) を活用し、課題解決に向けた研究開発や実証実験を実施。 ⇒ 「林業機械の遠隔操作」、「獣害対策ロボット」、「自動運転による福祉バス」など。

➤ 最新テクノロジーを活用した「地域課題」の解決。
 ✓ 企業・大学との協働を通じた「関係人口」の増加。
 ⇒ 持続可能な「百年の森林に囲まれた上質な田舎」の実現。

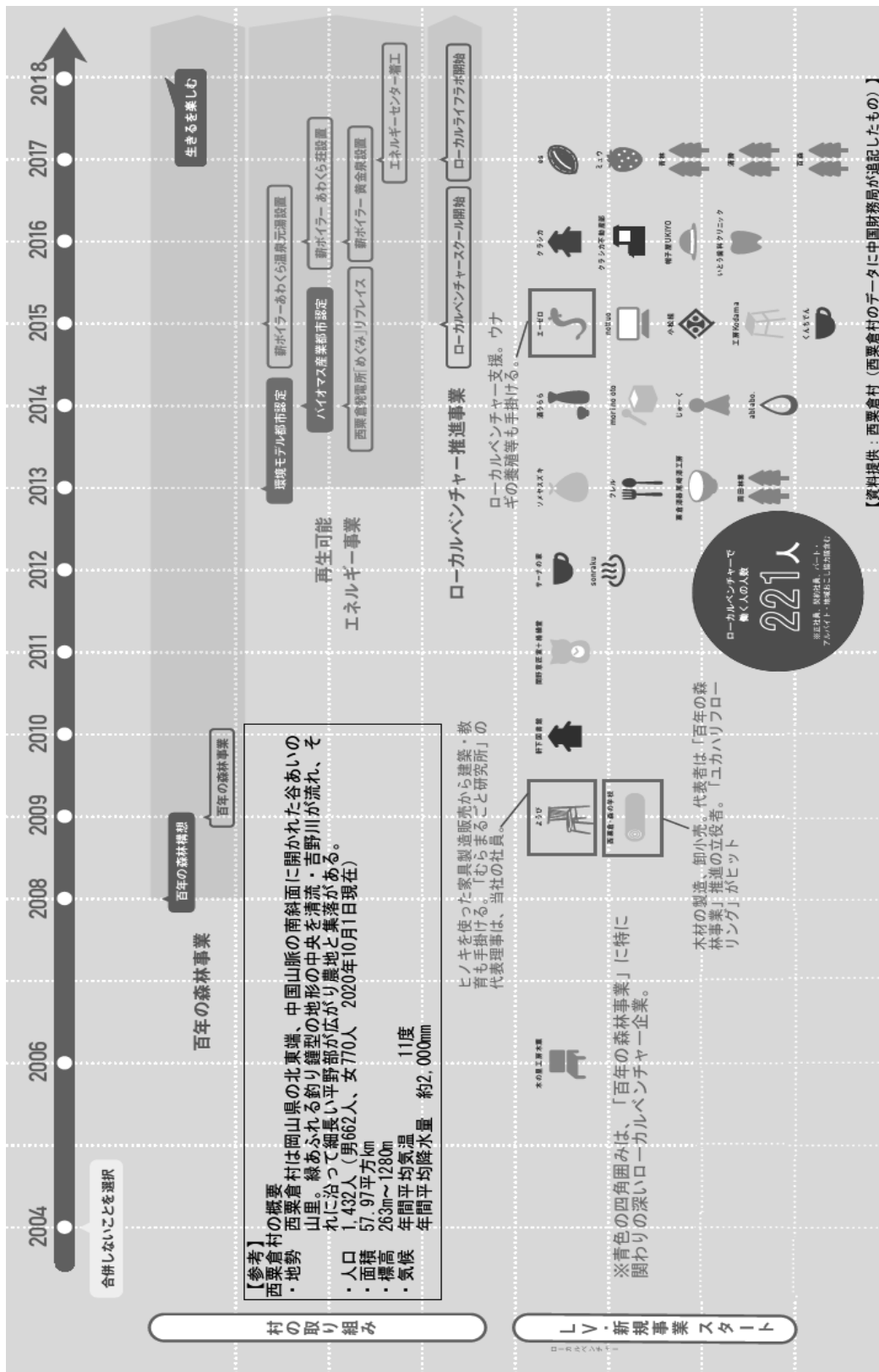


「むらまると研究所」
 ~最新テクノロジーは人、地域を「幸せにすることができるのか? ~

- 地域資源の調査、整理、分析、課題抽出及びオープンデータ化のほか、研究者・企業等とのマッチング、人的ネットワークの構築等を実施。
- 大手の建設会社や通信会社のほか、商社、金融機関等とも協働。

大島奈緒子代表理事
 「魅力的なデータをオープン化するとともに、最先端技術を行う企業等とマッチングを
 実現し、地域課題の解決につなげていきたい」
 「人的ネットワークを生かし、専門知識を持った人材の高い人材を都市部から呼び寄せたい」
 「まずは人口の1%をテクノロジー人材に育てたい。これが10%になった時、村は変わる」

西栗倉村とローカルベンチャーの歩み



Ⅲ. ウィズコロナ・ポストコロナに向けた企業の取組

最適なブランドバッグをお薦め ～「所有から共有へ」～

ラクサス・テクノロジーズ (株)

(所在地) 広島県広島市
(業種) ブランドバッグのシェアリングサービス (資本金) 1,628百万円 (従業員数) 99名

- 英会話教材の通販事業等で培ったITスキルを活用して、2015年に高級ブランドバッグを月額6,800円でレンタルするサービスを開始。2017年1月には「バッグ預かりサービス」も開始。
- 57ブランド・4万点のバッグから好きなバッグを無期限でレンタル。
- サービス開始から、わずか6年弱で会員は40万人に急拡大。

取組の背景

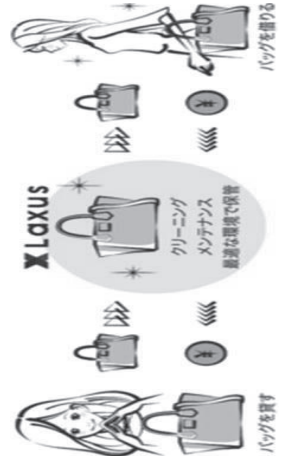
- 事業の拡大に伴いバッグが増加すると、顧客が好みのバッグを見つけにくくなる。

取組の概要

- 自社で開発したAIにより貸出履歴を解析し、「グッチを借りたことがない人は、シャネルが好き」といった傾向や、「貸出回数は少ないが、長く使われるバッグ」などを探出し、顧客にお勧め。
- GPSにより、顧客がブランドショップに立ち寄った場合は、顧客のスマホにそのブランドの商品情報等をプッシュ通知。

今後の展開

- 会員継続率は95%と、驚異の継続率を達成。ニューヨークをはじめ世界に「ラクサスモデル」の展開を予定。
- 昨年12月に、現在の5.5倍の会員220万人にも対応可能な新拠点を広島市内にオープンし、アプリ開発エンジニアやマーケティング、リペアなど300人超の雇用創出を目指す。採用は、新型のコロナウイルスで離職した方やママ世代を優先する方針。



水中研磨ロボットの開発 ～重労働からの解放～

日本サカス (株)

(所在地) 広島県広島市
(業種) 水環境のトータルソリューション (資本金) 10百万円 (従業員数) 23名

- 水族館・大型商業施設の水槽の設計、製造。
- 水族館から「水を抜かずに、水槽の傷を修復できないか」の相談を受けたことをきっかけに、自社の若手社員を中心に開発をスタート。
- 2017年に日本で初めて、水中で水槽を研磨して傷を修復する技術を開発。

取組の背景

- 水中研磨は、水の中の作業であるため、非常に重労働。
- また、職人技のため、技術の伝承が困難。

取組の概要

- 取引金融機関から、デジタル分野の専門家の紹介を受け、AIを活用する水中研磨ロボットの開発に向け連携。3年後の実用化を目指す。
- ロボットが水槽(アクリルパネル)の傷を検知し、その傷の深さを数値化するとともに、AIを活用して研磨の強度を調整することを想定。

今後の展開

- 従業員による水中での作業が不要となり、重労働から解放される。
- 作業時間を3割以上削減することや、職人技の承継が期待される。
- 水中研磨技術を背景とした受注の増加にも期待。

